

トランスナショナル・フェミニズムという視座

大阪大学大学院 近藤凜太郎

【1. 目的】

2000年代初頭から日本のジェンダー研究では、グローバル化の下での新たなフェミニズムの連帯を構想する立場として、「トランスナショナル・フェミニズム」の語を掲げた文献が現れている（青土社 2003; 大越 2004 など）。しかし、それら日本の文献群は、この用語の下に蓄積されてきた英語圏の理論的動向を参照しないため、概念上の混乱を生み、この概念に込められた政治的意味合いを曖昧にする傾向がある。本報告では、英語圏のトランスナショナル・フェミニズム論の動向をいま一度整理するとともに、それに照らして、植民地主義・グローバル資本主義とジェンダーをめぐる日本の言論状況の問題性を明らかにする。

【2. 方法】

世界的に注目を集めた2つの論集（Grewal & Kaplan eds. 1994; Alexander & Mohanty eds. 1997）と、その編者たちが執筆した他の文献群を主要な検討対象として、英語圏のトランスナショナル・フェミニズム論が何に対して異議を申し立て、いかなるフェミニズムのあり方を構想してきたかを確認する。加えて、それを、「トランスナショナル・フェミニズム」の名のもとに日本でなされてきた研究群と比較し、日本におけるこの用語の使われ方の問題性を指摘する。

【3. 結果】

英語圏のトランスナショナル・フェミニズム論の批判の矛先は、「グローバル・フェミニズム」と呼ばれる西欧中心的なフェミニズムに対して向けられる。「グローバル・フェミニズム」は、女性の経験の「共通性」を前提にすえる場合と、女性の多様性を認識しながらも女性間の歴史的な権力関係を認めない場合とがある。トランスナショナル・フェミニズム論の要諦は、こうした立場に抗して、フェミニズムの実践を条件づける植民地主義的な支配と従属の関係を問題化する姿勢にある。他方、日本では、単に一国の境界を越えた女性運動を記述する意味合いで使われる傾向が強く、「グローバル・フェミニズム」との差異が意識されることはほとんどない。

【4. 結論】

日本では、植民地主義・グローバル資本主義とジェンダーの交錯関係について、岡（2000）と千田（2002）の論争、「従軍慰安婦」研究、移民研究など、数々の領域で議論がなされてきた。しかし、最近になって上野千鶴子が新聞紙上で移民排斥発言を行ったように、植民地主義的関係の再生産に陥らないフェミニズムの連帯に向けて、批判的言語を鍛えていく余地はいまだに多く残されている。「グローバル・フェミニズム」と「トランスナショナル・フェミニズム」の区別を明確にしない日本の言論状況は、女性同士を隔てる歴史的な権力関係を問題化するフェミニズムと、そうでないフェミニズムとを混同させ、あるべき連帯への道筋を見失わせる事態を招きかねない。

【文献】

- Alexander, M. J. & Mohanty, C. T. eds. 1997, *Feminist Genealogies, Colonial Legacies, Democratic Futures*. Routledge.
- Grewal, I. & Kaplan, C. eds. 1994, *Scattered Hegemonies: Postmodernity and Transnational Feminist Practices*. University of Minnesota Press.
- 岡真理, 2000, 『彼女の「正しい」名前とは何か』 青土社.
- 大越愛子, 2004, 『フェミニズムと国家暴力』 世界書院.
- 青土社, 2003, 『現代思想 1月号 特集 トランスナショナル・フェミニズム』
- 千田有紀, 2002, 「フェミニズムと植民地主義」『大航海』 43: 128-145.